

審査の結果の要旨

氏名 大久保 公美

本研究は、妊娠期（胎生期）から乳幼児期までの期間に注目し、妊娠中の母親の食事の「質」が胎児成長に及ぼす影響ならびに幼少期の食習慣形成に及ぼす要因について検討したものである。そして、妊娠女性ならびに乳幼児の食事評価には、習慣的な食品の摂取傾向を総合的にとらえることが可能な「食事パターン」による評価手法（dietary pattern approach）を用い、以下の結果を得ている。

1. 大規模疫学研究で汎用される食事質問票から推定される摂取量データを用いて、クラスター分析により日本人妊娠女性の食事パターンの抽出を試みたところ、「肉類・卵」、「小麦製品（パン・菓子・麺類）」、「めし・野菜・魚介類」中心の3つのパターンが得られた。そして、食事摂取基準を比較基準として、抽出された各食事パターンの栄養適正を評価したところ、めし・野菜・魚介類が多く、パンや菓子類が少ない食事パターンを有する妊娠女性は栄養適正を満たしている確率が高いことが示された。本研究により、クラスター分析を用いた食事パターンによる評価手法が確立され、さらに栄養改善が必要な集団を抽出し、その特徴を明らかにすることが可能となった。
2. 妊娠中の母親の食事パターンと子どもの出生時体重との関連を検討したところ、栄養適正の最も高い「めし・野菜・魚介類」中心群と比較して、栄養適正の最も低い「小麦製品」中心群の母親は胎内発育遅延児を出産するリスクが有意に高いことが示された。解析対象者が少ないという限界はあるものの、この結果は、妊娠中の母親の食事パターンの栄養適正の低さが、子宮内における胎児の体重増加に不利に働くことを示唆したものである。
3. 離乳が完了した生後16~24か月の乳幼児を対象に、クラスター分析により「野菜・果物・高たんぱく質食品」および「菓子・嗜好飲料」中心の2つの食事パターンが抽出された。そして、子どもの食事パターンと母親の食事パターンの類似性が示され、乳幼児の食事パターン形成には、特に母親の学歴が重要な要因であることが示された。

以上、本論文は妊娠中の母親の食事パターンの栄養適正が子宮内における胎児の成長のみならず、乳幼児の食事パターン形成にも関連することを報告した世界でも希少な疫学研究である。さらに、妊娠中の母親への適切な栄養教育の必要性ならびに子どもの食事改善を目的とした栄養教育を行う際に考慮すべき点（母親の食習慣や学歴など）が示された。これらの結果は、実践面においても重要かつ新たな科学的知見であると考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。